

東風吹かば

明秀学園日立高等学校 第二学年通信
修学旅行特集号
平成26年度

年明け、マレーシアへ

特進ABコース250名

年明け、2月20日〜26日。本校特進A・Bコースの約二五〇名は、マレーシアへの修学旅行に行きます。私立高校では海外修学旅行が定番となってきましたが、その中でも、今回のマレーシア修学旅行は、本校で数えると今年度で4度目となります。生徒のみならず、先生、この修学旅行を通して、国際理解を高めると同時に、必ずや高校生活最高の思い出となることを期待しています。

どうして、私たちの修学旅行先はマレーシアなんだろう？という質問をよく聞かれますが、それには勿論理由があります。そもそも本校の修学旅行先は、どのような段階を経て決まるのでしょうか。

時期は、当該学年が入学する前の話です。当時の各学年主任と教務部長、教頭先生からなる修学旅行選定委員会が主となり、旅行会社3〜4社から持ち寄られたプランの入札制で、後に行なわれる業者のプレゼンテーションにより選定・審

査します。選定基準は、安全・衛生面、利便性、独自のオプショナル企画などのオリジナル性と各方面からのアプローチにより審査されます。最終的には委員会が集約した案を、校長先生に確認作業、職員会議を通して最終決定となります。

マレーシアは、東南アジアの中で、特に「治安が良い国」です。また、安定した経済や政治情勢を背景に暮らし良さにも定評があります。親日的でフレンドリーな国民性も、日本人が観光や定住を多く希望する理由の一つです。

それを表す有名なジョークがあります。「日本人が道で行き倒れになっていたら……シンガポールでは、救急車を待っている間に麻薬を持っていないか、ポケットの中身を確認する。フィリピンでは、金を持っていないか、ポケットの中身を確認する。マレーシアでは、普通に救急車を呼んで、介抱する。」と。(あくまでも、ジョークです。)

マレーシアは「多民族、多宗教の国」でもあります。

種々多様な文化が凝縮された都市や町並みは、国際理解教育に役立つ有意義な体験へと発展させる可能性を待っています。その中でも、「英語によるコミュニケーションが可能である」ということも魅力の一つです。母国語はマレー語ですが、英語も日常的に使われており、英会話や今までの英語学習の成果を試す場としても最適な環境です。

以上の理由から、本校は、今年度の修学旅行先をマレーシアに選定しました。

豊かな国土と風土

進化し続ける近代都市と溢れる自然美との融合

マレーシアは、日本との時差1時間。首都はクアラルンプールで、13の州と3つの連邦特別区によって成り立っています。また、ナン、マラッカ、サバ、サラワク州以外の州にサルタンがおり、5年ごとに行われる会議で国王が選出されます。人口約3千万人。国土面積は約33万平方kmで日本の約90%ですが、人口は約4分の1だから、ゆったりとした人工密度です。大きくはマレー半島とボルネオ島(東マレーシア)の地域に分けられ、気候は、一年を通して温暖で湿度の高い熱

帯性気候に属します。国教はイスラム教ですが(そのため、町中にモスクと呼ばれる教会、または礼拝堂を見ることができません)信仰の自由を認めている。多民族国家を反映して仏教、ヒンズー教、キリスト教、道教、シーク教を信仰する国民も多くいます。公用語はマレーシア語(マレー語)ですが、多民族国家の為中国系住民社会では中国語、インド系住民社会ではタミール語が使用されています。また、各民族間で会話をする際は広く英語が使用されているの



【マレーシア全景地図】

東風(こち)吹かば にはひおこせよ梅の花
あるじなしとて 春を忘るな
菅原道真

菅原道真の愛した白梅が、主人を慕って一夜にして京都から太宰府に飛んできたという「飛び梅」伝説の句より。



マレーシア最大の都市にして、首都でもあるクアラルンプール。高さ452mのペトロナス・ツインタワーに代表されるように、市内では都市開発が次々に進められている。一方では、イギリス統治時代の歴史的建造物が今も残るなど、新旧の文化が混在している。

マレーシア最大の都市にして、首都でもあるクアラルンプール。高さ452mのペトロナス・ツインタワーに代表されるように、市内では都市開発が次々に進められている。一方では、イギリス統治時代の歴史的建造物が今も残るなど、新旧の文化が混在している。



マレーシア最大の都市にして、首都でもあるクアラルンプール。高さ452mのペトロナス・ツインタワーに代表されるように、市内では都市開発が次々に進められている。一方では、イギリス統治時代の歴史的建造物が今も残るなど、新旧の文化が混在している。

マレーシア最大の都市にして、首都でもあるクアラルンプール。高さ452mのペトロナス・ツインタワーに代表されるように、市内では都市開発が次々に進められている。一方では、イギリス統治時代の歴史的建造物が今も残るなど、新旧の文化が混在している。

安心安全な旅を

航空機「安全神話」の再認識

前述でも、国民性はフレンドリーで、治安の良さは東南アジア屈指と言われるのは分かったが、今年、世界を震撼させた事件や事故がマレーシア航空機に連続して起こったことは、不安要素の一つとして皆さんの頭から離れないことは確かであろう。

3月8日、クアラルンプール発、北京行き239人が乗ったマレーシア航空ボーイング777型旅客機が、同日未明から管制塔との交信を絶ったと発表された。到着予定時刻の同日午前6時半(日本時間同7時半)を過ぎても消息がつかぬ、捜索が続いている。

アムステルダム発、クアラルンプール行きのマレーシア航空ボーイング777型旅客機が、現地時間7月17日午後4時20分(日本時間午後10時20分)ごろ、ウクライナ東部ドネツク州内に墜落した。ウクライナのポロシェンコ大統領は、同機がミサイルで撃墜された可能性があるとの見方を示した。

どちらも今年に起きた重大ニュースとして世界的に取り上げられ、未解決の不透明さを示した内容も共通している。かといって、一概にマレーシア航空を否定的に語られているわけでもなく、その真相は異なる国と国の関わりや国際的テロ行為の疑いとして報道されている。

一方で、同時に語られるのが、航空機の「安全神話」についてである。

世界中の航空事故は(1910年以降)民間、国営、全ての航空会社を含めて、約460件。日本国内で見れば、78件。

よく比較されるのは、昨年、国内の自動車事故発生件数は62万9021件。がん疾患による死亡者数、約36万人。心臓病疾患は、約20万人。など。

一生で航空事故に遭遇する確率は、統計的に見ればごくわずか。飛行機に毎日乗っていても、事故に遭うのは438年に1回だ。

航空機にとっては、他の乗り物や自然災害、疾病と比較され、その「安全神話」は不動のものとしてきたが、数か月の間に同じ航空会社が2度も事故に遭遇してしまう事実を目の当たりにすると、その神話に対しても疑いの目を向けなければならぬのは健全なことである。

本校では、この難局を乗り越えるべく、より安全で安心して臨める修学旅行を実現させるために、現地調査や旅行会社との入念な打ち合わせを繰り返し行なうなど、今後も様々な工夫や努力を重ねる所存です。